

不審な転落死

20年前——俺が9歳のとき。

家の近くで一人の女性が亡くなった。最初は飛び降り自殺だと聞いた。

その次に聞いたのはこんな話だった。

彼女は嘆きのダイヤに呪われたのだ。あの人は呪われたダイヤを持っていて、そのダイヤに魂を吸い取られた——そんなオカルトめいた話だった。

そんな馬鹿げた噂を聞いて、9歳の俺はほっとしていた。呪いでもなんでも構わないが、とにかく殺しじゃないのなら何でもよかった。

俺が見たものを否定してくれるなら、呪いでも大歓迎だったのだ。

女性が飛び降りたというその日。

俺は家でうたた寝していて、誰かが階段を上がる足音で目覚めた。寝ぼけた頭で考える。母さんが帰ってきたのか。じゃあお菓子を貰いに行こう。

階段から顔を覗かせて、玄関を見る。そこに母さんがいた。でも俺は声を掛けられなかった。

母さんの服の胸元が真っ赤だったからだ。

その赤色は歪んでいたが、手形のように見えた。

母さんは俺に気付かずに洗面所に向かう。俺は急いで自分の部屋に戻って布団を被った。

正直、自分が何を見たのか子供の俺にはよくわかっていなかった。ただ漠然と、見てはいけないものを見てしまったと思った。それで誰にも何も話さなかった。

もしかしてと思い始めたのは、その翌日。近所で女性が自殺したと聞いたときだ。もしかして、その女性は実は殺されていて。母さんの服のあの赤色は、そのときに付いた血だったんじゃないか。

——馬鹿げている。あの優しい母さんがそんなことする訳がない。でもそれじゃあ、あの赤色はなんだったんだ。

俺の頭の中ではずっとそんな堂々巡りが起こっていた。

だから呪いで女性が死んだと聞いたとき、呪いの存在は少し怖かったが、それでもいいと思った。母さんが無関係ならなんでもいい。

でも、数日後に警察が家にやってきた。

そして母さん——阿望^{りんよう}燐葉を連行していった。

母の死

母さんが帰ってきたのは連行されてから2カ月後だった。女性が飛び降りるのを目撃した人物が現れ、母さんは誤認逮捕だったと警察が認めたのだ。

母さんは落下現場に出くわしたが、ショックで通報するのを忘れ、その場を去ってしまっただけ、という話だった。

でも母さんに対する世間の目は変わらなかった。

警察の発表は小さく小さく新聞の隅に載ったっきりで、出歩けば周りの人が母さんを見て距離を取った。人殺しだとひそひそ囁き合っていた。

母さんが亡くなったのはそれから半年後だった。元から体が弱かったのに加え、拘置生活の負担が祟ったのだろう、と医者が言っていた。

結局、俺は母さんにあのときの赤色について聞くことができずじまいだった。

父からの呼び出し

親父——阿望 剛 から連絡が来たのは去年の11月だった。

開業した探偵事務所は閑古鳥が鳴き、依頼人が来ても浮気調査かペット探し。

胸につっかえるような謎をもう二度と抱えたくない。全部ほんののことを調べつくしてやる——そんな気持ちで始めた探偵という仕事だったが、なるほど世の中には思ったより謎が少ないらしい。

そんなことを仲のいい同業者にぼやいたら、じゃあ刑事になればいいと言われた。もっともだが、母さんを連れ去った警察も好きにはなれない。

仕方なく探偵事務所を何でも屋に鞍替えし、なんとか生計が立つようになったが、来るのはやはりつまらない仕事ばかり。

親父から連絡があったのはそんな時期だったので、俺は一も二もなく誘いに乗った。

宝石展を開くから手伝いを頼みたい。それが父の要件だった。

宝石展が開かれるのは温泉地として有名な箱根の美術館。

東京からでも2時間あれば行くことができる。宿も親父が取ってくれるというので、高い旅館にしてくれるよう頼んでおいた。

12月初め、俺は約束通り箱根に向かった。

親父が予約したという旅館に着けば家族が揃っていた。親父と、それから俺を含めた4人の兄弟姉妹。年末年始、それと母さんの命日以外で家族が揃うのは珍しい。

到着した晩、家族で夕食を囲んだ。俺は久しぶりの美味しい飯に舌鼓を打っていたが、翡翠と月長は様子が違った。

翡翠は親父が勝手に宿を取ったことを怒っていた。別に東京からの通いでもいいし、宿を取るにしたってもっと安いところがあったのに。そんな翡翠の愚痴を聞きながら、俺は自分が親父に高い宿を取らせた張本人であることは黙っていた。

月長の方は仕事が心配で食事が進まないようだった。親父の会社——阿望工業を継ぐ予定の月長は、どうも会社の様子が気になって仕方がないという様子で、しきりに自分のスマホを確認していた。昔から月長は心配性なのだ。

堇青^{きんせい}はあんまり変わったところなかったが、わざわざ高そうな日本酒を持ち込んでいるあたり、存分に羽を伸ばす気でいるのだろう。

そして親父は、そんな俺達の様子を見てにこにこ笑っていた。

嘆きのダイヤ

俺達がぎくしゃくし始めたのは12月の中旬だった。

ちょうど本格的に宝石展の準備が始まった頃だ。

俺達はまず会場の設営と展示会の宣伝に着手した。設備の調達を翡翠、会場レイアウトやシフトの決定を月長、宣伝を堇青が担当した。俺の仕事はスタッフの調達だ。

作業を初めてすぐ、俺達はこの宝石展の目玉を知った。

嘆きのダイヤ——呪われたブルーダイヤモンド。

まず思ったのは、親父の頭がどうかしちまったのか、ということだった。

それは母さんが誤認逮捕された事件で、飛び降り自殺した女性が持っていた宝石だ。ある意味では、俺達にとって仇^{かたき}と言ってもいいダイヤである。

親父は何かを隠している。

そう考えた俺は少し探りを入れてみようと、二人きりのときに親父に「ちょっとだけで構わないから嘆きのダイヤを着けさせてくれよ」と頼んでみた。

すると親父は急に怖い顔になった。

「絶対にこれに触るな」

ふざけている様子はなかった。

結局のところ謎はいっそう深まっただけで、解決の糸口は掴^{つか}めなかった。

そして年の明けた1月10日。

嘆きのダイヤを展示するメインホールが少し物足りないということで、大きなシャンデリアが飾られ、会場の設営は完了した。

怪盗ホープの予告状

1月中旬から始まった宝石展は、さほど賑^{にぎ}わいはしなかったが、特に問題が起きることもなかった。平和の一言だ。

厄^{やっかいごと}介事が降^おって湧^わいたのは2月1日のことだった。

嘆きのダイヤを貰い受ける——怪盗ホープからの予告状が届いたのだ。

怪盗ホープと言え、半年ほど前から巷^{ちまた}を騒がせている美術品泥棒だ。なんでも変装の達人であり、警察でもその正体が掴めていない。

すぐに刑事と、それから嘆きのダイヤに掛けてあった盗難保険の担当者が集められた。

この担当者というのが俺の元同業者、つまりは探偵だった。

犬吠^{いぬぼうぎ}埼^{るり}瑠璃。

そもそもは嘆きのダイヤの盗難対策を完璧にしたいという親父の要請を受け、盗難保険の会社が派遣してきた雇われの探偵だ。仲の良い同業者に確認したところ、盗難事件専門の探偵でその道では結構有名らしい。宝石探偵、なんて二つ名もあるのだとか。

最初に犬吠埼が来たのはちょうど設営が終わり、宝石展が始まる前のタイミングだった。

犬吠埼は数日間に渡って設備やレイアウトを確認し、親父の施したセキュリティに太鼓判^{たいこばん}を押した。これなら怪盗ホープが来ても盗むことはできないでしょう、と。

もちろん、このときはたとえ話として怪盗ホープの名を出しただけだった。それがどういう訳か、本当に予告状が来てしまったのだ。

2月1日のうちに改めて警察による会場の設備の見直しが行われた。

警察の出した結論は犬吠埼が出したものと同じだった。セキュリティは完璧。そしてそもそも、怪盗ホープは今まで予告状など出したことがないので、今回の予告状が本物かどうかはわからない。

ひとまず安全は確保されている、というのが警察の結論だった。だが現場を仕切っていた黒岩^{くろいわ}という刑事は、念のため刑事を何人か会場に張り込ませると主張した。

刑事がうろちょろするのは気分がよくないが、まあ事態が事態だから仕方がない。俺はそう思っていたが、警察嫌いの堇青と、それから親父も反対し、最終的には黒岩一人だけが会場に張り込むことになった。

警報の誤作動

刑事・黒岩が来てから間もない2月3日。

別館の火災報知器に誤作動が起きた、と聞いた。小火騒ぎ^{ぼや}に乗じて盗みを働くというのはミステリーの鉄板だが、誤作動が起きたのは嘆きのダイヤがある本館ではなく別館だ。

ただの偶然だろうと思って、それ以上は探らなかった。

翡翠の悩み

展示会中に困ったのは煙草^{たばこ}だった。

ヘビースモーカーというほどでもないが、一日一回は煙草を吸わないと落ち着かない。親父は展示会中はできるだけ本館のメインホール内（嘆きのダイヤが展示されているところだ）にいるように言っていたが、流石にそこで煙草を吸う訳にもいかないので、俺はいつも本館の外に出て煙草を吸っていた。

ちなみに、刑事である黒岩も喫煙者のようで、よく手ぶらでメインホールから出ていくのを見かける。喫煙者にとっては世知辛い世の中だ。^{せち がら}

2月9日のことだ。

中庭で煙草を吸ってから本館に戻る途中で翡翠と出くわした。なにやら暗い表情をしていたので、自販機で缶ジュースを買って渡す。

「いらない。缶ジュースって無駄に高いし」

無駄遣いにうるさい翡翠はそう言うが、それゆえに貰い物を無駄にできないのが弱いところだ。無理矢理ジュースを押し付けると、おとなしく飲み始めた。

「どうしたんだよ？ 暗い顔して」

「ちょっとね……。兄さんは、月長のことどう思う？」

「どうって、別に普段と変わらないんじゃないか。いつもより落ち着いてるぐらいだろ」

「そうなんだけど……。むしろ、落ち着き過ぎている気がするの」

言われてみればそんな気もするが、落ち着いているならば問題ない気もする。

「まあ、あんま考え過ぎても仕方ないだろ。月長だって大人だしな」

思い付いて、残り少なくなった煙草のケースとライターを翡翠に押し付ける。

「久しぶりに吸ってみたら気分転換になるんじゃないか。いらなかったら後で返してくればいい」

翡翠がライターを返してきたのはその二日後だった。煙草の方は返ってこなかったもので、まあ少しは役に立ったということだろう。

嘆きのダイヤが紅に染まる

事件当日の2月13日。

俺は13時過ぎに展示会場へ向かった。

本館の金庫室に貴重品をしまい（この金庫室は俺達家族の他にも、宝石展スタッフ、それから警備担当の犬吠埼と黒岩も使用している）、メインホールの唯一の出入り口であるセキュリティゲートに向かう。ゲートにいる警備員に免許証を見せて本人確認してから、小物入れにスマホとライター、それから指輪を置いた。ゲートが金属検知器を兼ねているからだ。

メインホールに入り、小物入れに置いたものを警備員の一人から受け取る。もう一人の警備員は、俺が持ち込んだ金属品を用紙にメモしていた。

受け取った指輪をはめる。指輪は小さなダイヤが着いたもので、親父の発案で宝石展の間、家族全員がダイヤが付いた装飾品を身に着けることになっていた。

俺がメインホールに入ったときには既に家族全員が揃っていた。

軽く声を掛けてから自分の持ち場につく。基本はホール内で適当に立っただけでいいが、宝石の説明が欲しいという客がいれば、俺が説明することになっている。父を除けば家族で宝石に詳しいのは俺と月長だけだ。

と言っても、俺の知識は昔宝石店でバイトしていたときに覚えたもので、ちょっとした豆知識くらいしか知らない。例えば煙草を吸うときにダイヤは外した方がいい、とか。ダイヤは熱に弱く、煙草の火でくすんでしまうことがあるのだ。俺もこの指輪を着けてからは、煙草は左手で吸うことにしている。

そういう訳で、ちょっとした解説は俺が、展示している宝石の売買の話になったら月長が担当することになっていた。

何度か宝石の解説をこなした17時前。

煙草を吸いたくなったのでメインホールを出て近所の公園に向かった。誰もいない公園で煙をふかし、しばらくしてからメインホールに戻った。

ほどなくしてその日の展示会は終わり、後片付けをしていた19時21分。

メインホール内にいるのは俺達家族と、刑事である黒岩だけだった。

手が空いた頃合いを見計らって、俺は堇青^{みはか}に声を掛ける。

「堇青、ちょっとこれ見てくれ」

手渡したのは昨晚作った資料だ。俺が解説中によく話す宝石の豆知識が載っている。

「俺ばかり説明させられるのは不公平じゃねえか？」

要するに、これを読んで堇青も説明の仕事をやってくれということだ。弁護士なら資料を暗記するのも得意だろう。

堇青は何か答えようとして、ぴたりと止まった。代わりに資料を俺に返してきて、スマホを取り出す。どうやら着信があったらしい。

両手で書類を抱えながら堇青の通話が終わるのを待っていると、何か変な音がした。なんだと音源を目で探っていたら、堇青は少し怒ったように「話を逸^そらさないで」とスマホに向かって言う。仕事の電話だろうか。

そのすぐ後、堇青はスマホを下ろした。通話が終わったのだろう。やっと俺の番だ。

そのとき——ふっと館内が真っ暗になった。

停電か、と思って辺りを見回してすぐに異常に気付いた。

嘆きのダイヤが紅に輝いている。

闇に浮かぶように、嘆きのダイヤが光っている。

馬鹿げた噂が頭を過^{よぎ}った。

嘆きのダイヤは触れたものの魂を吸い殺す——。

流石に俺もそんな噂を真に受ける歳じゃない。だが、無視できないことが起きた。

「やめろ、やめてくれ！」

親父の声だ。何かに取り憑^つかれたように叫んでいる。

その少し後、轟音^{ごうおん}が響き渡った。何か巨大なものが床に叩き付けられる音。

気付けば、その役目を終えたとしても言うように、嘆きのダイヤは光るのをやめていた。

しばらく経って館内に光が戻る。

そこで俺——いや俺達が目にしたのは、落下したシャンデリアの下敷きとな^{ことき}って事切れた、親父・阿望剛の姿だった。

元探偵の務め

家族の誰かが親父を殺したとは思えなかった。

しっかり者で家族のまとめ役の堇青。儉約家の度が過ぎることもあるが家族想いの翡翠。繊細だが人一倍責任感のある月長。

俺には俺達の中に犯人がいるとは思えない。

だが、警察はそう考えてはくれないだろう。遺産が少しでも入ってくるなら、それは立派な動機だと考え、俺達を疑うはずだ。

でも、俺はそこに真実がないと確信している。

そしてそれと同じぐらい、この事件を解決したいと強く思っている。ずっと忘れられない謎なんて一つだけで十分だ。

自分で捜査するとなれば人手がいる。俺はすぐに元同業者に連絡を取った。